

論文

沖縄アイデンティティを測定する

——沖縄在住の大学生を対象とした調査結果から

高良 美樹*, 與久田 巖**, 倉元 直樹***

*琉球大学法文学部, **立命館大学学生サポートルーム, ***東北大学高等教育開発推進センター

Can we measure ‘Okinawan Identity’?: Survey for undergraduate Students in Okinawa

Miki Takara*, Iwao Yokuda **, Naoki T. Kuramoto***

* Faculty of law & letters, Ryukyu University, ** Student Support Room, Ritsumeikan University,

*** Division of Research in Higher Education, Center for Advancement of Higher Education,

Tohoku University

The present study was concerned with the structure and the related variables of Okinawan Identity which was tentatively defined as evaluation of Okinawa and association of oneself with Okinawa. We conducted a questionnaire survey for undergraduate students (n=205) in Okinawa. Survey items included subjects' demographic variables, evaluation of historical events, self-assessment, frequency in the use of a dialect, foods, customs, Okinawan Identity, etc. Factor analysis was conducted on Okinawan Identity, and produced three factors: attachment and pride in Okinawa (main part of Identity), special characteristics of Okinawa, and inferiority complex. Regression analysis showed that foods customs and self-assessment (social desirability) were related to attachment and pride in Okinawa. These results were discussed with regard to ethnicity studies, and possibility of a generalization was suggested.

Keywords : Okinawan Identity, multiple regression analysis, Undergraduate Students

キーワード : 沖縄アイデンティティ, 重回帰分析, 大学生

1. はじめに

私たちは、どの民族としてどこで生まれるかについて自ら選択することはできない。すなわち民族、出自というものは誰にとっても運命的なものであり抗うことはできない。自己が何者であり、社会の中にどのように位置づけられるかは、従来、アイデンティティの問題として検討されてきた。民族、出自は、アイデンティティを確立する上で比較的、揺るぎない確固とした構成要素のように思われがちだが、実際には、それが自明で客観性が保証されているとはいえない。端(1993)によると「民族を厳密に定義することはきわめて困難である

*〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1番地琉球大学法文学部人間科学科

Correspondence concerning this article should be sent to: Miki Takara, Faculty of Law & Letters, Ryukyu University, 1 Aza-Senbaru, Nishihara-Cho, Okinawa, JAPAN, 840-8502

E-mail: nov1113@ll.u-ryukyu.ac.jp

が、社会学的には人類の下位にくる社会集団であることは間違いない。「民族とはある程度の血縁的共通性と居住地域の同一性を基礎として成立した文化共同体」となり、決して客観的で安定した特徴とはいえない。出自についても何世代前まで遡るかによって事情は異なるであろうし、グローバリゼーションが進行中の現代においては両親の出自が異なるということはとくに珍しいことでもない。ここに民族、出自に関するアイデンティティについて検討する意義の一端が存在する。

一方、それを自己概念の一部としてどのように評価し、位置づけるかは、当人の認知的評価を介して初めて可能となる。その際、その民族あるいは地域がどのような歴史的経緯を経ているのか、また現時点における社会的条件はどのようなものなのかについての認識・判断が評価に影響を及ぼすと考えられる。東江（1963, 1991）は、沖縄人の顕著な特徴を「空道の人格」と表現する。それは、確固たる主義心情をもたずにただ強大なものに追従して姑息な存在の維持をねがう事大主義として説明される。また、「空道の人格」と「他人志向」（Riesman, 1961）との類似点を指摘しつつ、他人志向が個人の適応様式にとどまるのに対し、沖縄の空道の人格は集団的適応様式にまで発展していると指摘する。ただし、ここで気をつけるべきことは、この指摘が自己を含む集団全体を自虐的に卑下することとは異なる次元のものだということである。東江は、このような集団的性格特徴を、沖縄の伝統と文化が外勢による直接間接の支配の中で生存様式を求め、かつそれを正当化するための人間の根強い努力として捉えているのである。このような心理的機制は、出自に関連したアイデンティティを形成する際にも働くと思われる。つまり、出自に関連したアイデンティティには、その地域に関する歴史的事実、社会的条件に関する個人の認識が影響すると考えられる。

沖縄の近現代史について概観すると、1879年の琉球処分で沖縄が日本の国土の一部となった後も過酷な経済状況から大量の海外移民を輩出、第2次世界大戦では悲惨な地上戦を経験した。戦後は米国統治を経て1972年に返還、歴史の負の遺産としての米軍基地を多く抱えつつ、現在に至っている。沖縄は1世紀ほどの間に複数回の施政権の変更にも晒され、文化的にも大きな変容を遂げた。それだけに沖縄人のアイデンティティ（以下、沖縄アイデンティティと記述する）には複雑な問題が含まれる。沖縄出身者自身は、自らをウチナーンチュ（＝沖縄人を表す沖縄方言）と称し、ナイチャー（＝本土出身者を表す沖縄方言）と区別し、微妙に対応を変えたとの指摘（東江, 1963）もあり、このような自他の表象の仕方について心理学的関心も向けられてきた。また、沖縄が

日本という国の枠の中にありながら日本を相対化、客観視し、独特のアイデンティティを形成しているとも指摘されている（伊高，1986）。一方，1972年の復帰から40年近くが経過し，部分的には状況が変わってきている。「沖縄ブーム」と言われる現象も起こり，沖縄あるいはその住民に対するイメージの変容が起こり，それに呼応するように沖縄人自身の沖縄あるいは自己に対する意識も変わりつつあるように思われる。平・川本・慎・中村（1995）は在日朝鮮人青年の民族的アイデンティティが民族固有文化の経験と関連していることを見出した。沖縄と歴史的・社会的な文脈は異なるが，具体的な文化的要素がアイデンティティを規定している可能性は無視できない。

ところで，沖縄アイデンティティを研究の俎上にのせる際，それをどのような問題として位置づけるかは，研究者の価値判断に委ねられる部分が大いように思われる。県民性，比較文化的観点，エスニシティ，歴史的・政治的状況との関連など多様な観点から沖縄アイデンティティについて検討することが可能である。ここで本研究では，主にエスニシティとの関連において沖縄アイデンティティを心理学的に検討することを主たる課題とする。そもそも，日本におけるエスニシティに関する通俗的な定義の仕方は，「血統主義」というべきもので，出自，血統についての客観的な事実から機械的に個人の所属する民族集団が決定されると考えられている（平他，1995）。だが，単一民族とされる「日本人（日本民族，または，大和民族）」にしても，中国大陸や朝鮮半島からの渡来者が歴史的に数多く存在したことを考えると，客観的とされた出自，血統にも曖昧さが含まれることが理解できよう。このようにエスニシティが一義的に定義できない状況が存在する場合に分類の手掛かりとなるのは個人の主観的な心理的所属感である（平他，1995）。このことと関連して Rotheram & Phinney(1987)は，民族的自己同定（ethnic self-identification）（「自分，及び，他者が共通に認める客観的（あるいは，間主観的）な出自の認識に由来する，自分は何々民族に属す，という知識」という概念を提唱している。つまり，エスニック・アイデンティティは，血統，出自の客観的事実というよりそれらに対する認識に基づくと考えられるということである。その際，客観的事実が，その民族集団の諸条件を十全に満たしているとはいえない，あるいは典型性を備えているとはいえないケース・状況が生じる場合がある（例えば，Devereux,1982）。具体的な例としては，両親の民族的出自が異なるいわゆる混血児の場合が相当する。このようなケースにおいては，自身の帰属に関しての意志的な選択が働く。また，沖縄の場合，施政権変更を含む歴史的変遷を経験する中で安定した自己概念を獲得するために，自己の心理的な帰属を日本と

沖縄のいずれにするかという問題が生じた。このことに関しては、沖縄県人が自己の帰属に関して日本と沖縄のあいだで葛藤する様相を四類型に分類した上での検討がなされている（東江,1990；國吉,1998）。

本研究は、沖縄県内に在住する大学生の沖縄アイデンティティを心理学的に調査し、現時点でその様相が経験などの個人のプロフィールや沖縄に関わる文化的・歴史的事項への関心や態度および生活習慣とどのように関連しているかについて実証的に明らかにすることを目標としている。

2. 沖縄アイデンティティ把握の試み

民族集団は、他の民族との接触の中で、自らの民族を固有のものとして他の民族と区別しようという性向が働く（De Vos & Romanucci-Ross,1982）。このことから出自に関連したアイデンティティについての意識がとくに強く顕在化されるのは、自身を異なる文化的枠組みの中で位置づける必要が生じた場合であると考えられる。すなわち、異文化接触を通して自身の固有性を再認識し、自らを相対化した上で、新たな環境への適応を要請されるような場合がこれにあてはまる。このような状況として、自身が従前の場所に身をおいたまま他の文化地域からの流入者と接する場合、および自身が他の地域に転出し、そこで異文化適応をはかりつつ生活する場合が想定される。そして後者において出自に関するアイデンティティ意識がとくに強まることが予想される。これを本研究の枠組みの中で具体的にいうと沖縄県出身者が県外や海外で居住するという状況があてはまる。そして、住民が生活の糧を得るのに十分な資源、産業をもたない沖縄県においては、出稼ぎ、移民という形でこのことが現実になんじてきた。

石原（1982）は、日本本土在住の沖縄人出稼ぎ移住者を対象に研究を実施している。沖縄差別・蔑視が激しい時代背景の中で彼らは自ら沖縄人居住地域を形成し、そこで異文化適応にともなうカルチャー・ショックを軽減していったことが示されている。また、その地域では、沖縄特有の思考・行動様式が温存され、それが2世以降に伝承されていった。石井（1993）は、沖縄の一集落の出身者が他府県の出稼ぎ移住地において同郷人のネットワークを介して異文化適応、職業的社会化を成し遂げていることについて事例研究を通して明らかにした。その中で同郷人ネットワークの機能が、生活基盤の確立といった実利的なものから故郷に思いを及ぼし自分たちを係留し、出自的アイデンティティを確認する場へと時代とともに変容していったと指摘している。

沖縄出身者の海外移民に関する研究の系譜は、その移民先によって整理する

ことが可能であろう。1900 年前後に、沖縄県からの第一回の海外移民が始まっている。南米においては、ブラジル、ペルー、アルゼンチンなど多くの地域が沖縄出身者の移住先とされてきた。ブラジルでは、70 年代以降、「ブラジルのウチナンチュ」という新たなエスニック・アイデンティティが生まれ、それがサンパウロ市内の沖縄系コミュニティにおける文化要素の共有を通して達成された（森，2000）。ここで特徴的なことは、戦前からの移民が 70 年代初頭に沖縄を訪れ、先祖を象徴する位牌、遺骨、香炉などをブラジルに移住させたということであろう。この行為によって、故郷から遠く離れた異郷の地において共通の祖先を崇拝することが可能となり、そのことを通してエスニック・アイデンティティの再構築が可能になったのである。アルゼンチンにおいては、移住者が沖縄コミュニティを設立し、日常生活の中で郷土料理などの食文化を継承し、伝統芸能を楽しむ一方、沖縄地元の新聞社が南米各地に通信員を配し、故郷と移住先のあいだで情報を共有することが沖縄アイデンティティの保持に役立っていると指摘されている（福井，2003）。北米では、多くの沖縄県人がハワイに移住した。ハワイの沖縄系移民とその子孫たち（ハワイ・ウチナンチュ）が形成した郷友会などのコミュニティが移住後 100 年経過した現在においても活性化しており、それは、個人間ネットワークや組織間ネットワークなど、ネットワークの複合的な集積体として位置づけられる、と指摘されている（川和，2007）。川和は、そのコミュニティに関与していないハワイ・ウチナンチュを取り込むことで、さらにネットワークの維持・拡大および沖縄アイデンティティの世代間伝達の可能性が高まると示唆している。

これまで述べてきたように故郷を離れた地において出自に関するアイデンティティを形成するには、同郷人とのネットワークが重要である。だが、これは、単にネットワークを介して出自の共通性を強調することによってアイデンティティが形成されるということではない。同郷人ネットワークあるいはコミュニティにおいて祖先（森，2000）、言語（金城，2010）、伝統芸能（井口，2001；岡本，1997）、食文化（福井，2003）などに関する具体的活動をともに行い、それらについて共有していることの確認作業を通して出自に関するアイデンティティの形成は初めて可能になると思われるのである。

沖縄県内に在住の者を対象にその出自と関連したアイデンティティについて調べた研究は、意外なほど少ない。これは、先に述べた「自身が従前の場所に身をおいたまま他の文化地域からの流入者と接する場合」に該当し、出自に関する意識が顕在化されやすい状況といえよう。国内・国外における人の移動が活性化している今日においては、沖縄県内において海外からの流入者と接す

る機会は頻繁にある。法務省(2009)発表の都道府県別外国人登録者数によると平成19年度時点で沖縄県内には、8914人の外国人が滞在しており、これは、全国33番目の人数であり、他府県と比して際立って多いということはない。だが、沖縄に多く駐留する在日米軍の軍人およびその家族は外国人登録の対象とはなっていない。これらの在沖米軍人およびその家族4万5千人を外国人登録者8914人に加えれば沖縄に滞在する外国人は5万4千人となり、外国人比率は4.0%に達し、全国1となる(社会実情データ図録, 2007)。このことから、沖縄は、全国的にみて外国人との異文化接触の機会が豊富な地域であるといえる。

沖縄県の地元新聞社である琉球新報社は、沖縄県内在住の20歳以上の男女1500人を対象に、沖縄県民の物事の考え方や趣向の現状・変容を把握することを目的として、5年ごとの調査を2001年より開始している(琉球新報社, 2002)。質問の中に「沖縄人であることを誇りに思いますか」という項目が含まれており、8割以上が肯定的な回答をしている。とくに高齢者においてその傾向が一層顕著である。2006年におこなわれた同様の調査においても類似した結果が得られた(琉球新報社, 2007)。学術的な調査研究としては、國吉の先駆的な研究がある(國吉, 1998)。沖縄県内に在住の多様な世代を対象とした調査において、沖縄人および日本人という両方の帰属に関して誇りをもつと回答した者が6割以上を占め、とくに前者に誇りをもつ者の比率が後者を上回った。また、郷土意識や生活様式などに関連した質問項目への回答結果には世代差がみられ、沖縄への愛着、伝統行事への参加意欲、方言の使用のいずれにおいても高齢世代で肯定的な回答が得られた(國吉, 1998)。林(2009)は、沖縄の近現代史を沖縄県民のアイデンティティの葛藤史そのものと位置づけ、沖縄在住の者を対象に「沖縄人」と「日本人」のいずれに帰属意識をもっているかについて2005年から2007年にかけて3度にわたる調査を実施した。それによると、全般的に沖縄人への帰属が多い傾向(3割~4割)にあるものの、日本人、あるいは両方に対して帰属する者の比率もほぼ同程度(2割~4割)存在していた。この結果は、沖縄在住者のアイデンティティの揺らぎ、あるいは、葛藤を示していると思われる。質的な研究としては、戦後、20代の頃に(戦時中敵国であった)米国へ8年間の留学経験をもつ心理学者を対象とし、パーソナルドキュメントを通して検討した前原・稲谷(1996)がある。前原・稲谷は、青年後期における米国への留学経験が沖縄人としてのアイデンティティの形成に大きく影響したであろうとの予測に基づき、検討を実施するが、それを支持する明確な結果は得られていない。

これらの研究は、沖縄人が郷土をどのように評価し、自らを関連づけているかということを示すものとして高い価値を含んでいる。しかし、沖縄アイデンティティ自体を主要な研究題材として位置づけ、測定信頼性を確保する上で十分な質問項目数を用い、実証的に検討した研究はほとんど存在しない。そこで、本研究においては、沖縄アイデンティティを「沖縄という地域、および住民をどのように評価し、沖縄と自分自身とをどのように関連づけているか。」というように暫定的に定義した上で、沖縄県内の在住者対象に調査を実施し、その構造と規定因について探索的に検討する。

3. 沖縄アイデンティティの測定・分析

方法

質問紙

質問紙は5つのセクションから構成されている。「セクション I」は沖縄での居住歴を含む被調査者のデモグラフィックなプロフィール、「セクション□」は沖縄の歴史的出来事 8 項目に対する経験・意識、「セクション□」は「沖縄的」、「日本的」とされる性格特性語（東江, 1991）に関わる自己認知（30 項目）と方言の使用頻度（16 項目）、「セクション□」は食べ物（14 項目）、生活習慣（8 項目）、年中行事（18 項目）、沖縄的な祭事等（8 項目）に関する経験、「セクション□」は沖縄に対する思い（沖縄アイデンティティ, 20 項目）である。「セクション□」以降は、生活習慣が二肢選択、一部に付加的情報を求める記述式回答が含まれていたが、その大半は、5段階評定の形式を取った。

なお、本論文は、予備調査と本調査の2回にわたって実施した調査データをまとめた分析結果に基づくものである。2回の調査において表現の微修正を除いてほぼ同様の質問項目を用いた。ただし、予備調査に含まれていた「死生観」尺度は、本調査においては除外した。

分析方針

各セクション、または、下位カテゴリーごとに探索的因子分析を行う。リッカート法で得点化し、カイザー・ガットマン基準とスクリー法を併用して因子数の候補を選ぶ。共通性の初期値は SMC、バリマックス回転による直交解から無理なく解釈できる因子構造を採用する。各尺度の項目得点の単純和をもって尺度得点とする。尺度化の後、沖縄アイデンティティを目的変数、他の下位カテゴリーごとの変数を説明変数とした重回帰分析を実施する。以上の分析手続きを通して沖縄アイデンティティの測定、その規定因についての探索的検討

をおこなう。

被調査者・調査の実施

被調査者は沖縄県内の2つの大学に通学する学生 205 名。県外出身者も含む。心理学関連の授業時を利用して調査を集団で実施した。調査実施に際しては、「回答が各人の自由意志に基づくものであること」「調査全体、あるいは、個々の項目に対して回答しづらい場合には調査協力を強制しない」旨について説明し、倫理的配慮をおこなった。なお、調査は、2005 年 2 月～2005 年 7 月にかけて実施した。

被調査者プロフィール

本研究における被調査者のプロフィールは、年齢：10 代 83 名(40%)、20-24 歳 117 名(57%)、25-34 歳 4 名(2%)、不明 1 名(1%)、性別：男 80 名(39%)、女 124 名(61%)、沖縄居住歴：先祖代々 155 名(76%)、祖父母の代 4 名(2%)、両親の代 4 名(2%)、自分の代 2 名(1%)、一時滞在 38 名(19%)、県外在住経験：あり 54 名(26%)、なし 150 名(74%)、県内移住歴：あり 81 名(40%)、なし 124 名(60%)、現住所居住年数：平均 9.0 年（標準偏差 7.7）であった。なお、丸め誤差のため合計が 100%にならない場合がある。

以下にプロフィールに関する各質問項目への回答結果を示す。

「あなたの家族や親戚も、沖縄に住んでいますか？」

自分だけ県内 39 名(19%)、家族だけ 5 名(2%)、県内に親戚 45 名(22%)、居住地域に一部親戚 58 名(28%)、親戚多数 57 名(28%)。

「トートーメー（家督）について、あなたは、以下のどれに当てはまりますか。」

継ぐ立場 20 名(10%)、継がない立場 74 名(37%)、未定 23 名(11%)、言葉自体を知らない 61 名(30%)、ない 23 名(10%)、その他 1 名(1%)。

「あなたは、これからも沖縄に住み続けていきたいですか？」

即時県外移住希望 15 名(7%)、県外移住予定 35 名(17%)、希望しないが移住予定 8 名(2%)、県内居住希望 127 名(62%)、県内居住熱望 11 名(5%)、県内在住絶対 9 名(4%)。

尺度構成

「セクション II」～「セクション VI」の項目を用いて構成された尺度は以下の表 1 の通りである。表の最初の欄はカテゴリーで各セクションを構成する

表1 尺度値の分布, 信頼性係数

カテゴリー	尺度名	平均値	標準偏差	尺度範囲	α
影響	歴史・政治(4)	9.33	3.96	4-20	0.83
	芸能・文化(4)	10.85	3.50	4-20	0.73
性格	社会的望ましさ(10)	35.06	5.83	10-50	0.82
	本土的性格(11)	34.44	6.30	1-55	0.73
	沖縄的性格(6)	20.79	3.79	6-30	0.64
方言	容姿・身体(7)	7.72	2.50	7-35	0.85
	感情・気質(7)	11.54	5.19	7-35	0.81
食べ物	沖縄食(6)	19.35	4.35	6-30	0.77
	日本食(3)	7.83	2.22	3-15	0.60
	米国食(3)	8.72	2.17	3-15	0.58
風習	沖縄の風習(8)	25.23	9.78	8-40	0.88
	本土の風習(5)	12.07	4.27	5-25	0.58
	沖縄的祭事(7)	1.92	1.43	0-7	0.58
沖縄アイデンティティ	沖縄への愛着・誇り(5)	20.07	4.07	5-25	0.76
	沖縄の特殊性(5)	16.68	3.66	5-25	0.65
	コンプレックス(4)	11.12	2.81	4-20	0.56

質問項目群である。その次に示した尺度名は、カテゴリーごとに因子分析をした結果、因子として抽出された項目群につけられた因子名を示している。また、尺度名の後の（ ）内の数値は項目数である。ここでは、本研究の分析の中核をなす沖縄アイデンティティ尺度についてのみ具体的な質問項目の内容を一部紹介する。「沖縄への愛着・誇り」因子は、「私は沖縄県民であることに誇りを感じる」、「私は沖縄が好きだ」、「私は日本人というよりも沖縄人という意識が強い」などの5つの質問項目から構成されており、沖縄と自分自身とを肯定的・積極的に関連づける項目内容になっている。「沖縄の特殊性」は、「沖縄は日本にとって特別な存在だ」、「一般に、本土の人の考え方は沖縄の人の考え方とは違う」、「本土の人は、沖縄のことをもっと理解すべきだ」などの5つの質問項目から構成されており、沖縄および沖縄の人が本土（沖縄以外の他府県）との関係において特殊性を帯びているとの判断に関わる内容である。「コンプレックス」は、「いつまでも沖縄、沖縄とこだわる必要はない」、「沖縄は様々な面で遅れている」、「私が本土に行ったら沖縄から来たことを知られたくない」などの4つの質問項目から構成されていて、沖縄に対する否定的評価、あるいは、自身との切り離しといった内容である。

表2 「沖縄アイデンティティ」との相関関係

カテゴリー	尺度名	沖縄への愛着・誇り	沖縄の特殊性	コンプレックス
影響	歴史・政治	.14 *	.06	.06
	芸能・文化	.34 ***	.22 **	-.07
性格	社会的望ましさ	.24 ***	.23 **	-.07
	本土的性格	-.12	.05	.16 *
	沖縄的性格	.10	.07	.00
方言	容姿・身体	.14	.05	-.09
	感情・気質	.46 ***	.18 *	-.09
食べ物	沖縄食	.59 ***	.15 *	-.06
	日本食	-.10	-.03	.02
	米国食	.04	-.06	.02
風習	沖縄の風習	.63 ***	.21 **	-.11
	本土の風習	-.00	.15 *	-.17 *
	沖縄的祭事	.47 ***	.25 ***	-.06

表3 沖縄への愛着・誇り(変数増加法によりモデル選択)

	標準偏回帰係数
歴史的出来事の影響:芸能・文化	0.069
性格:社会的望ましさ	0.210 ***
性格:沖縄的性格	0.064
方言:感情・気質	0.080
沖縄食	0.284 ***
風習:沖縄の風習	0.348 ***
沖縄的祭事	0.043
	R ² 0.534
	adj-R ² 0.516 ***

*: p < .05, **: p < .01, ***: p < .001

各尺度の α 係数は、 $\alpha = .54 \sim .88$ であった。とくに項目数の少ない尺度において α 係数が低かったが、各尺度の内部一貫性は概ね、保たれていると判断した。

沖縄アイデンティティの構造と規定因

「沖縄アイデンティティ」と他の各尺度との相関関係は表2の通りである。「沖縄への愛着・誇り」尺度において、他の変数との関係がとくに多くみられ

表4 沖縄の特殊性(変数増加法によりモデル選択)

	標準偏回帰係数
歴史的出来事の影響:芸能・文化	0.150 *
性格:社会的望ましさ	0.158 *
性格:本土の性格	0.067
方言:容姿・身体	-0.059
方言:感情・気質	0.102
米国食	-0.062
風習:沖縄の風習	0.039
風習:本土の風習	0.169 *
沖縄的祭事	0.154
	R ² 0.166
	adj-R ² 0.125 ***

*: p < .05, **: p < .01, ***: p < .001

表5 コンプレックス(変数増加法によりモデル選択)

	標準偏回帰係数
歴史的出来事の影響:歴史・政治	0.115
歴史的出来事の影響:芸能・文化	-0.094
性格:本土の性格	0.142 *
方言:容姿・身体	-0.071
風習:本土の風習	-0.156 *
	R ² 0.073
	adj-R ² 0.049 *

*: p < .05, **: p < .01, ***: p < .001

た。歴史的出来事の影響に関しては「歴史・政治」,「芸能・文化」の2変数,性格では「社会的望ましさ」,方言では「感情・気質」,食べ物の「沖縄食」,風習の「沖縄の風習」,「沖縄的祭事」といった多様な変数が関連していた。「沖縄の特殊性」尺度においても程度は弱いもののほぼ同様の関連性がみられた。「コンプレックス」尺度は,他の二尺度と異なっており,関連性をもつ変数が少なく,「性格」の「本土の性格」,「風習」の「本土の風習」のみが関連していた。

次に,「沖縄アイデンティティ」を各変数がどのように規定しているかを検討する目的で,「沖縄アイデンティティ」の各下位尺度を目的変数,セクションII～VIの各下位尺度を説明変数とした重回帰分析をおこなった。「沖縄への

表6 「沖縄アイデンティティ」についての属性変数を用いた比較

属性	値	n	沖縄への愛着・誇り	沖縄の特殊性	コンプレックス
性別	男	78-9	18.6 (4.4)	16.1 (3.9)	11.1 (2.7)
	女	124	20.9 (3.6) ***	17.0 (3.5)	11.1 (2.9)
移住歴	移住	38-9	15.1 (3.7)	15.9 (4.0)	11.0 (2.8)
	先祖代々	165	21.2 (3.2) ***	16.9 (3.6)	11.1 (2.8)
居住年数	相関	89	.197	.215*	.300**
県外居住	経験あり	14	19.6 (4.3)	15.2 (3.4)	10.8 (3.0)
	経験なし	150	21.4 (3.1)	17.0 (3.6)	11.2 (2.8)
県内移動	なし	84	21.5 (3.1)	17.0 (3.6)	10.9 (2.9)
	あり	81	21.0 (3.3)	16.7 (3.6)	11.4 (2.8)
家族・ 親戚	自分と家族	6	19.8 (4.1)	19.7 (2.3)	11.2 (3.4)
	県内親戚	44	21.7 (2.4)	15.8 (3.9)	10.1 (2.6)
	親戚一部	58	20.9 (3.7)	17.2 (3.1)	11.6 (2.9)
	親戚多数	57	21.4 (2.9)	17.0 (3.6)	11.5 (2.7)
	モデル	—	—	p<.05	p<.05
相続 立場	継ぐ	19	21.7 (2.6)	17.7 (4.0)	12.1 (2.3)
	継がない	73	21.4 (3.0)	17.1 (3.6)	10.4 (2.6)
	未定	23	22.2 (2.3)	17.0 (3.1)	11.5 (2.7)
	知らない	31	19.8 (3.8)	15.9 (3.5)	11.6 (3.1)
	ない	17	20.8 (3.6)	16.5 (3.4)	12.4 (2.7)
モデル	—	—	—	p<.05	
県内 居住 希望	県外予定	30	18.4 (3.6)	16.0 (3.1)	12.2 (3.3)
	継続希望	116	21.7 (2.8)	16.7 (3.6)	10.8 (2.6)
	県内絶対	19	22.7 (1.8)	19.2 (2.8)	11.7 (2.7)
	モデル	—	p<.001	p<.01	p<.05
多重比較			県外 < 継続, 熱望	県外, 継続 < 熱望	県外 > 継続
最大影響 事件	沖縄戦	56	21.3 (2.9)	16.4 (3.8)	11.1 (2.9)
	タレント	34	20.7 (3.6)	17.1 (3.1)	10.3 (3.3)
	ちゅらさん	13	23.1 (1.7)	17.5 (2.8)	11.0 (2.4)

愛着・誇り」に関する結果を表3として示した。特徴として、非常に説明率が高く、「沖縄の風習」、「沖縄食」、「社会的望ましさ」が正の関連性を示した。

同様に「沖縄の特殊性」に関する結果を表4として示した。「社会的望ましさ」、「本土の風習」、歴史的出来事における「芸能・文化」の影響が正の関連性を示しており、単純相関の分析における「沖縄への愛着・誇り」との結果の類似性（表2参照）はみられなかった。

表5には、「コンプレックス」に関する結果を示した。「本土の風習」、「本土

的性格」が弱いながらも関連性をもっていたが、前者は負の関連、後者は正の関連といった異なる方向での関連性を示した。

表6は、「沖縄アイデンティティ」について被調査者を属性変数で群分けをした上で、比較検討した結果を示している。下位尺度によって有意差を示す属性変数は異なっていた。「沖縄への愛着・誇り」については、「女性」、「先祖代々の居住者」、県内での居住を「希望」「熱望」とする者が他の者より高い値を示した。「沖縄の特殊性」については、県内での居住を「熱望」する者が他の者より高い値を示し、家族・親戚のいずれかが沖縄県内に居住しているかどうかということが有意な効果を示した。また、沖縄県内での居住年数と正の関連性があった。「コンプレックス」については、「県外での居住を予定」する者が「県内での居住を希望」する者より高い値を示し、また、トートーメーの相続に関する立場および家族・親戚のいずれかが沖縄県内に居住しているかどうかということが有意な効果を示した。さらに沖縄県内での居住年数と正の関連性があった。

4 考察および残された課題

本研究で用いた沖縄アイデンティティ尺度を因子分析した結果、3つの因子が抽出され、それらは、「沖縄への愛着・誇り」、「沖縄の特殊性」、「コンプレックス」と命名された。

「沖縄への愛着・誇り」因子は、個人の主観的な心理的所属感(平他, 1995)、意志的な選択に基づく自身の帰属を反映するものになっており、「沖縄アイデンティティ」の中核をなすものであるといえよう。「沖縄の特殊性」は、沖縄および沖縄の人が本土との関係において特殊性を帯びているとの判断に関わる内容であった。沖縄が日本国内の他の地域と比較して相対的に特殊であり、顕著な差異を有する地域であるという認識は、自身をそれに帰属させることで他地域の人々と識別可能な属性を有するユニークな存在であるとの根拠になりうるかもしれない。「コンプレックス」は、他の2つの因子と異なり、沖縄に対する否定的評価、あるいは、自身との切り離しといった内容である。平他(1995)は、在日朝鮮人青年が、自己の民族への否定的評価、他者による偏見・差別を回避するために本名の代わりに通名を用いる可能性について検討している。沖縄県内在住の大学生の場合、他の地域に移動しない限り、マジョリティでいられるのであり、在日朝鮮人青年とは社会的背景が異なる。だが、少なくとも意識の上では、沖縄およびそこに住む自らを含む人々が日本全体の中ではマイノリティであり、偏見・差別の対象になりうるとの認識が未だ残ってい

るのかもしれない。

「沖縄アイデンティティ」の規定因について探索的検討をおこなうことを目的として3つの下位尺度を目的変数、デモグラフィック変数や歴史認識、性格の自己評価、方言の使用、食べ物、年中行事についての質問への回答を説明変数とした重回帰分析をおこなった(表3,表4,表5)。

「沖縄への愛着・誇り」に対して「沖縄食」、「沖縄の風習」、「社会的望ましさ」が正の関連性を示した(表3)。ここで「沖縄食」とは、チャンプルー(様々な具材と一緒に炒めた物)、沖縄そば、ゴーヤーであり家庭で日常的に口にするものである。また、「沖縄の風習」は、ワークイ(旧盆の最後に祖先の霊を送る)、ウンケー(旧盆の初日に祖先の霊を迎える)、シーミー(旧暦3月の墓参り)など祖先崇拜に基づき家族・親戚が集まる催し事に関連した項目内容であった。つまり、日常的かつ具体的な食習慣および風習が沖縄風であることが「沖縄への愛着・誇り」を規定していたことになる。自身の出自に対する愛着・誇りは、歴史的な出来事などの影響によって理性的に判断されるというより、日々の生活の中で醸成されるものようである。これは、沖縄出身者が移住先における同郷人コミュニティにおいて祖先崇拜・言語活動・食文化などの具体的活動をともにおこない、自身らの出自に関する確認作業を通してアイデンティティ形成をおこなうことと符合した結果である。ただし、ここで「社会的望ましさ」が正の関連性を示したことに注意する必要がある。これは、協力、思慮、人情、道徳など10個の質問項目から構成されている。本研究においては、東江(1991)に基づき沖縄性格・本土性格といった対比の中で性格特性語をリストアップしたため、社会的望ましさは、事前には想定しなかった因子である。社会的に望ましい特徴を多く有することが「沖縄への愛着・誇り」を高めるとは、どのようなことを意味するのであろうか。これは、沖縄に限定したことではなく、自身の居住地に愛着・誇りを感じることに、自身が社会的に望ましい特徴を多く有すると認識することとのあいだに相互規定的な関係があることを意味するのかもしれない。ただし、本調査の結果だけでは、考察の材料が十分とはいえない。それは、本調査の対象者が大学生という若い世代で沖縄県内の在住者に限定されていることと関連している。すなわち、今回の調査対象者より年長の沖縄の人々が歩んできた歴史には、差別や偏見の対象となる沖縄アイデンティティを自ら否定し、希薄化しようという試みも含まれてきたように思われるのである。かつて、沖縄県知事の西銘順治氏が、「沖縄の心とは何か」と問われて、「それは、日本人になりたくて、なりきれない心だろう」と即答したというエピソードがある。その出来事は、復帰後既に10年以上を

経過した頃のことである。つまり、その当時においては、沖縄人と日本人という2項対立が存在し、前者を否定し、後者に同化していきたくないと希望する沖縄の人々が一定数存在したことを意味すると考えられる。今後、調査対象者に中高年者、あるいは、県外・国外に在住している沖縄出身者を含めることによって、自身の居住地への愛着・誇りと自身の社会的望ましさととの相互規定的な関係の一般性についてより詳細に検討することが可能かつ必要であろう。

「沖縄の特殊性」に対して、芸能・文化と関連した「歴史的出来事の影響」、 「本土の風習」が正の関連性を示した(表4)。芸能・文化と関連した歴史的出来事とは、沖縄サミット(2000年)、ちゅらさん(2001年放映のNHKの連続ドラマ)、沖縄出身タレントブーム(1995年の安室奈美恵以降)などの4項目であった。また、「本土の風習」は、ひな人形、たなばた、おせちなど他の地域から沖縄に流入し、定着した風習に関する項目である。本調査の対象者が調査実施の2005年時点で大学生であることを考慮すると、彼らが中学生から高校生だった比較的、最近においてメディアを介して沖縄が全国から注目を浴びたことが、「沖縄の特殊性」に対する意識を高めたことになる。また、本土の風習に日常的に馴染むことが、むしろ「沖縄の特殊性」を際立たせることにつながるようである。本土の風習への異文化接触を通して自文化を相対的に判断・評価することが可能になり、特殊性を認識していくといった過程が想定できよう。「社会的望ましさ」は、ここでも正の関連性を示した。「沖縄の特殊性」の項目は、沖縄という地域およびそこに住む人々がユニークで独自な存在であるという主張と関連する項目内容になっている。自己に対する肯定的な評価は、自身の出自および自身を含む集団についての特殊性を強調し、自らのユニークさに関する自己主張を高めることにつながると思われる。

「コンプレックス」に対しては、「本土の風習」が負の関連、「本土的性格」が正の関連性を示した(表5)。「本土的性格」は、注意深い、神経質、現実的など11個の項目から構成されている。日常生活において本土の風習を取り入れることが少ない一方で、性格特性としては本土的とされる特徴を多く有することが沖縄と関連した「コンプレックス」を高めていることになる。東江(1990)は、沖縄の人の心の様相を「日本人になりたいか、なりたくないか」、「日本人になってしまったか、なれないでいるか」の二軸を交差させた四つの組み合わせに分類している。その分類法に従うと「日本人になりたい」のに「日本人になれないでいる」日本人願望型が、ここで得られたプロフィールに対応することになる。つまり、自身の性格特性として本土的とされる特徴を多く有すると認識することが願望を示す一方で、日常生活において本土の風習を取り込む

までには至っていないということである。

「沖縄アイデンティティ」についての属性変数を用いた比較（表6）において、「沖縄への愛着・誇り」については、「女性」、「先祖代々の居住者」、県内での居住を「希望」「熱望」とする者が他の者より高い値を示した。何世代にもわたって沖縄に居住し、自身も将来的に居住し続けたいとの希望をもつ者の「沖縄への愛着・誇り」が高いことについては、納得しやすい結果といえよう。男性に比して女性の方が高得点であることについては、若干の考察が必要だと思われる。前出の重回帰分析によると「沖縄への愛着・誇り」を規定する変数として「沖縄食」、「沖縄の風習」が抽出された（表3）。その結果に対する考察として、日常生活における具体的な食習慣・風習がアイデンティティ形成に寄与する可能性に関して言及した。この可能性については、食習慣や風習の形成・維持において主導的な役割を發揮することの多い女性にとくにあてはまり、「沖縄への愛着・誇り」の高得点につながったのかもしれない。

「沖縄の特殊性」については、県内での居住を「熱望」する者が他の者より高い値を示し、家族・親戚のいずれかが沖縄県内に居住しているかどうかということが有意な効果を示した。また、沖縄県内での居住年数と正の関連性があった。沖縄県内での居住経験が長い者ほど、「沖縄の特殊性」が際立って感じられ、そのことが将来にわたって沖縄に居住し続けたいという希望につながっているようである。

「コンプレックス」については、「県外での居住を予定・希望」する者が「県内での居住を希望」する者より高い値を示し、また、トートーメーの相続に関する立場および家族・親戚のいずれかが沖縄県内に居住しているかどうかということが有意な効果を示した。さらに沖縄県内での居住年数との正の関連性があった。沖縄という地域及びその居住者に対してコンプレックスを抱く者が将来、県外での居住を予定・希望することは、自然な流れといえよう。また、沖縄県内での居住年数の長い者ほど沖縄の否定的な側面に気づく機会が多いということだと思われる。トートーメーを相続する立場にある者（通常、本家筋の長男）および家族・親戚のいずれかが沖縄県内に居住する者が「コンプレックス」に関して高得点であることは興味深い。トートーメーを相続するとは、大抵の場合において仏壇・位牌を引き継ぐと同時にシーミーやお盆など先祖崇拝に関連した行事を親類縁者を招いて催す義務を負うことにつながる。つまり、トートーメーの相続とは、将来にわたって沖縄に住み続ける契約を親類縁者と取り交わすことなのである。本人の希望とは関係なく、沖縄への居住継続を余儀なくされた者において「コンプレックス」が強いということは将来的にどの

ような問題・課題につながるのだろうか。これが、実際には、未だトートーメーを相続していないと推測される大学生に固有にみられることなのか、今後の検討が必要であろう。

本研究において沖縄県内在住の大学生の間で「沖縄アイデンティティ」と結びついているのは各種の文化的要因であることが示された。一方で、沖縄の施政権返還以前や、さらに、沖縄戦当時の記憶を止める世代は、本研究の結果に強い違和感を覚えるかもしれない。歴史的、個人的経験によっては、本報告の主たる調査対象となった若い世代とは相当に異なる意識構造を保持している可能性がある。今後は、項目を精選し、より幅広い年代層および沖縄県の離島、県外・国外に住む沖縄出身者に対する調査を行い、沖縄アイデンティティの重層的な構造の把握に努めたい。

参考文献

- 東江平之「沖縄県人の意識構造の研究」、『人文社会学研究』1号、琉球大学法文学部、1963、1-20頁
- 東江平之「意識にみる戦後沖縄の社会」太田昌秀教授退官記念論文集『沖縄を考える』、1990、339-360頁
- 東江平之『沖縄人の意識構造』、沖縄タイムス社、1991
- Devereux,G.Ethnic identity:Its logical foundations and its dysfunctions,In G.De Vos & L. Romanucci-Ross(Eds.),Ethnic identity:Cultural continuities and change.Chicago:University of Chicago Press.1982.42-70.
- De Vos,G, & Romanucci-Ross,L.,Ethnicity:Vessel of meaning and emblem of contact,In G.De Vos & L. Romanucci-Ross(Eds.),Ethnic identity:Cultural continuities and change.Chicago:University of Chicago Press.1982.363-390.
- 福井千鶴「アルゼンチンにおける沖縄人移民の研究—沖縄人移民の特異性とアイデンティティ—」『国際関係学部研究年報』第24集、2003、189-206頁
- 端 信行「民族」『新社会学辞典』、有斐閣、1993、1399頁
- 法務省 2009 「平成20年末現在における外国人登録者統計について」
Available to: http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_090710-1_090710-1.html
- 伊高浩昭『沖縄アイデンティティ』、マルジュ社、1986
- 井口淳子「ウチナーンチュ（沖縄人）になるためのエイサー—尼崎・琉鼓會にみる芸能とアイデンティティの関わり—」『音楽研究』第18巻、2001、5-22頁
- 石原昌家「沖縄人出稼ぎ移住者の生活史とアイデンティティの確立」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科篇』10(1)、1982、63-68頁

- 石井宏典「職業的社会化過程における「故郷」の機能—生活史法による沖縄本島一集落出身者の事例研究—, 社会心理学研究, 第8巻第1号, 1993, 9-20頁
- 川和清太郎「ハワイ沖縄系郷友会の占める場所—ハワイ・ウチナーンチュの社会的ネットワークをめぐる—」『移民研究年報』13号, 2007年, 59-77頁
- 金城宏幸「ウチナーンチュの越境的ネットワーク化と紐帯—「チムグル」を運ぶ言語的文化—」『移民研究』6, 2010, 83-98頁
- 國吉和子「沖縄人(ウチナーンチュ)のアイデンティティと郷土意識(1)」, 『沖縄大学地域研究年報』10, 1998, 33-57頁
- 前原武子・稲谷ふみ枝「アメリカ留学経験と発達—生涯発達の事例研究」『生涯発達』, 1996, 184-195頁
- 森幸一「ブラジルにおける沖縄系人のアイデンティティの変遷過程」『産業総合研究調査報告書』(8-4), 2000, 43-56頁
- 岡本純也「民族舞踊と地域アイデンティティ: 沖縄の民族舞踊エイサーの事例」『研究年報』, 一橋大学, 1997, 59-62頁
- Riesman, The lonely crowd: a study of the changing American character (1961) (加藤秀俊 [訳] 1964『孤独な群衆』, みすず書房)
- Rotheram, M.J., & Phinney, J.S., Introduction: Definitions and perspectives in the study children's ethnic socialization, In J.S. Phinney & M.J. Rotheram (Eds.), Children's ethnic socialization: Pluralism and development. Newbury Park, CA: Sage. 1987. 10-28.
- 林泉忠「沖縄住民のアイデンティティ調査 (2005年~2007年)」『政策科学・国際関係論集』11, 2009, 105-147頁
- 琉球新報社『沖縄県民意識調査報告書 2001』, 琉球新報社, 2002
- 琉球新報社『沖縄県民意識調査報告書 2006』, 琉球新報社, 2007
- 社会実情データ図録 2007 「都道府県別外国人登録者数」 Available to:
<http://www2.tcn.ne.jp/honkawa/7350.html>
- 平直樹・川本ひとみ・慎栄根・中村俊哉「在日朝鮮人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて」, 『教育心理学研究』43号, 1995, 380-391頁